



LIXIL

NEWSLETTER
つくる、つなぐ、とどける

リクシルをつくる人 vol.12

株式会社LIXILは、世界中の誰もが願う、豊かで快適な住まいを実現するために、日々の暮らしの課題を解決する先進的なトイレ、お風呂、キッチンなどの水まわり製品と窓、ドア、インテリア、エクステリアなどの建材製品を開発、提供しています。

このニュースレターでは、LIXILの高品質な製品の礎となる日本のものづくりに焦点をあてその取り組みをご紹介します。

発行日：2026年3月27日

スマート

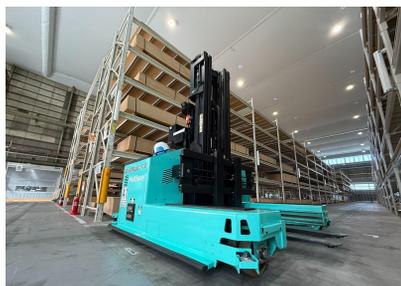
DXへの挑戦: RFID×AGF連携によるスマート倉庫管理システムの独自構築
ドアをつくる名張工場(三重県)の事例を紹介

名張工場は、外部調達した自動フォークリフト(AGF)・制御システム(RCS)と工場内で内製した倉庫管理システム(WMS)を組み合わせ、資材をRFIDタグで管理し最適な場所に自動格納するフリーロケーション倉庫管理の仕組みを独自に構築した。これにより、従来から課題であった人とフォークリフトの接触事故の防止や仮置きをなくし蔵置スペースを2倍に拡大するなど、工場の安全性と効率性を改善して大きな成果を上げている。

AGF導入の真髄は、単純なフォークリフトの自動化ではなく、在庫状況に基づき何をどこへ運ぶか判断し、指示するWMSと、最適なルートを計算するRCSによる高度な役割分担との連携にある。

この仕組みによって、AGFは資材の先入先出や既存のAGVとの安全な交通整理といった複雑なルールを24時間正確に実行し、作業の属人性を根本から排除した。また、RFID連携による在庫データベースのリアルタイム自動更新や、人手を介さない自動棚卸走行モードなど、現場の具体的な課題を内製技術で解決している。

内製化によって、外注での導入に比べて開発コストの削減に加え、現場の要望に外部業者を介さず迅速に対応できる柔軟性と、AGF連携システムのノウハウを社内に蓄積できるという、将来に向けた重要な資産を築いている。今後はWMSを汎用性の高いベースモデルとして他工場への展開を進めるなど、LIXIL全体へのDXの推進する役割を担っていく。



わかりやすい動画も公開中
視聴は[こちら](#)から
QRコードからもアクセスできます
す！ぜひご覧ください



技術

目視検査の限界を超え、新たなラインを育てる。
タイル検査・自動化への7年
タイルを製造する東濃工場(愛知県)の事例を紹介

木目や石目などの意匠を極限まで再現する「デジタル加飾技術」。その進化はタイルの付加価値を高めた一方で、微細な「傷」や「汚れ」の判別を困難にし、人間の目による目視検査を限界へと追い込んだ。東濃工場はこの課題に対し、AIと自動化を組み合わせ、ライン間で人が介在しない「タッチレスライン」の構築に挑んだ。

最も高い壁となったのが、独自の「AI検査」の導入である。AIに判断基準を学ばせるため、工場中から不良品を一枚ずつ拾い集め、手作業で読み込ませる地道な日々が続いた。それでも、PJメンバーたちは決して諦めず、画像上で不良パターンを再現する生成AIの活用など、創意工夫を重ねることで、当初16日間を要した学習期間をわずか3日程度へと劇的に短縮させたのである。

検証開始から実装まで、費やした歳月は約7年。このプロジェクトを成功に導いたのは、役職の垣根を超えて「何を指すか」という軸を常に共有し、失敗を恐れず改善を繰り返す工場の風土文化がある。

その結果、新ライン稼働から4年間、流出不具合ゼロを更新し続けている。かつて13名で支えていた工程は、現在は3名で運用可能なスマートな現場へと変貌した。

東濃工場が目指す完全無人化の本質は、人を単純作業から解放し、よりクリエイティブな領域へと導くことにある。限界なき品質への追求が、東濃工場の新しい働き方を切り拓いていく。



製販協働

「見て、触れて、納得」する工場見学へ。「PremiAL」を起点に製販協働を実現 サッシを製造する下妻工場（茨城県）の事例を紹介

循環型低炭素アルミ「PremiAL（プレミアム）」への関心が高まる中、2025年4月、下妻工場は営業部門と強固に連携を組み、工場見学プログラムを新たに進化させる企画をスタートさせた。生産現場でのリアルな体験と、お客さまが実際に品質を体感できる展示を取り入れ、現場一丸となって製品の理解促進に努めている。

「PremiALの魅力をも、理屈ではなく肌で感じてほしい」。その思いから、下妻工場はサッシドア事業部や材料事業部との垣根を越えたプロジェクトを始動させた。これまでの工場主導の見学ルートを見直し、営業現場のニーズを取り入れたプログラムへの刷新である。

安全を最優先に確保しつつ、稼働する設備の熱気を間近で感じられるルートの構築には、現場ならではの細かな工夫が求められた。また、説明にあたる従業員も、専門的な知見をわかりやすく伝えるために自発的に学習と練習を重ね、コミュニケーションの質を高めていった。

実際にアルミビレットの重みを感じ、端材の強度を自らの手で確かめる「体感型」の展示を導入した結果、今年度、下妻工場には約1,000名のお客さまが来場。そのうち約300名が「PremiALの製造現場を直接見たい」という目的で訪れた。「環境への取り組みと品質の高さがよくわかった」というお客さまの共感と信頼の

声は、確かな手応えとして、今、工場や営業現場で働く一人ひとりの大きな誇りへと繋がっている。



溶解炉の迫力を間近に感じられる見学ルート



←営業部門と議論を重ねて作り上げた専用展示ブース

お客さまが実際にPremiALに触れ、その品質を直に確かめられる仕掛け。また、コンパクトな展示セットを開発し全国10以上の営業拠点へも展開、工場発の取り組みがLIXIL全体の営業活動を力強く牽引している

LIXILを支える工場のエキスパート

LHT 岩井工場 加工課 長濱大起さん 現場の「リアル」が人を育てる。人づくりこそ現場を強くする原動力

LIXILでシャッターの製造を一手に担っている岩井工場において、長濱は、最重要ラインであるシャッターラインの職長を務める。長濱は「現場のリアルが人を育てる」という実体験に基づいた考え方から、人づくりが何より重要と断言する。人が強くならなければ、現場も強くならないという信念のもと、若手メンバーの自主性と積極性を引き出す仕組みを構築した。



その中心となるのが、メンバーとの方針確認会だ。長濱は、リーダーたちが答えを教えるのではなくヒントを与えるコーチングを意識し、メンバー自身が課題を発見し、解決策にたどり着くよう導くスタイルを徹底した。自分の提案が現場で成果を生む喜びを知るこの取り組みにより、あるラインでは約半年で当初計画に対し品質を向上させながら生産性も大幅にアップさせるという目覚ましい成果を達成した。

どんなことにも常にトップを目指してチャレンジする長濱の目標は「シャッターと言えばLIXIL」と言われるまでにブランド力を浸透させることだ。若手からは「頼りになる兄貴分」として、上司からは重要商材を任せられる「信頼感の厚い人材」として期待されている。若手主体の現場を牽引し、さらなる高みを目指す長濱の挑戦は、LIXILのものづくりの未来を支える大きな力となる。



◆長濱さんの紹介は、こちらの[webサイト](#)でも紹介されています。ぜひご覧ください。

参考情報

LIXILは、国内では、北海道から沖縄まで34拠点の工場を展開し、日本中に水まわり製品、建材製品をお届けしています。



●LIXILの生産拠点について

<https://www.lixil.co.jp/corporate/recruit/about/workplace/>

●「つくる、つなぐ、とどける」について

現場の第一線で事業活動を支えている工場や開発・設計担当者や工事やメンテナンスを担う人びと、ショールームをはじめとした日々お客さまと接する際の大切にしている想いなどを紹介しています。<https://www.lixil.co.jp/corporate/brand/employee/>

発行元

株式会社LIXIL (<http://www.lixil.com/jp>)

本社：東京都品川区西品川一丁目番1号大崎ガーデンタワー24F

※このリリースは、LIXIL Newsroom (<https://newsroom.lixil.com/ja/>)

でも発表しています。